

胆道閉鎖症

●講師：仁尾 正記 教授

(東北大学大学院医学系研究科 小児外科学分野)

●日時：平成27年1月23日 (金) 17:30～

●場所：医学教育図書棟3階 第2講義室

•Lecturer: Prof. Masaki Nio

(Division of Pediatric Surgery,
Tohoku University Graduate School of Medicine)

•Date: January 23rd (FRI) 2015, from 17:30.

•Place: Lecture room 2, Medical Education & Library Building 3F.

金曜日の開催となります
のでご注意ください。

This seminar will be
held on Friday



葛西手術が開発されて約60年を経過し、胆道閉鎖症（以下本症）の治療成績は著しく改善したが、本症は依然として病因不明の難治性疾患である。手術成績の改善傾向も最近ではたいへんゆるやかとなっており、近年の救命率の向上は肝移植の普及に負うところ大というのが現状である。最近では、葛西術後きわめて長期間を経過した後に肝不全が進行する例や、妊娠・出産を契機として黄疸再発をきたす例なども経験され、このような症例の増加が今後さらに深刻な問題となることが予測される。このような問題をできるだけ少なくするためにも、葛西手術でいかに治癒に近い状態にまで導けるかが大きな鍵である。従来生後2ヶ月が早期手術の基準となっていたが、日本胆道閉鎖症研究会が行う胆道閉鎖症全国登録データの検討では、とくに新生児期手術例の成績が良好であることが示された。今後、多くの例を新生児期に手術できるような体制整備を目指すべきであり、この目的達成のためには適切な時期にマススクリーニングを実施することが不可欠と思われる。近年母子手帳に挟み込まれた便色カードの活用が期待が寄せられる。

●担当：猪股教授（小児外科学・移植外科学分野）

Inviter: Prof. Inomata (Dept. of Pediatric Surgery & Transplantation)

●レポート宛先/Essay (To Prof. Inomata) : yino@fc.kuh.kumamoto-u.ac.jp

●レポート宛先/Essay (CC: Student Affairs Sec./医学教務) : iyg-igaku@jimu.kumamoto-u.ac.jp